

ビワ

にほんのよびかた ^{びわ} 枇杷

バラかビワぞく

12

なまえのゆらい

みのかたちがむかしのがっきの琵琶（びわ）に
にているから。

にほんでは1000年まえからつかわれている。

びわのとくちよう

- ・くだものさいばいとしてはきゅうしゅう、しこくがおおくてちばけん、しずおかけんわかやまけんなどのかいがんでさいばいされている。
- ・はっぱはこいみどりいろでながさは20cm、はばは10cmくらいでみじかいがらがある。
- ・はなはえだのさきにできるあさがおのようなかたちでたくさんついていて、あきのおわりからふゆのはじめにさく。

そのほか

- ・むかしまでは10gくらいのちいさいつぶだったけどそのあとにおおきなつぶの50gがうまれていまひとがたべているびわはあたらしくなったもの。
- ・びわのたべるところはせきをとめたりからだのなかをよくしてくれる。はっぱははきけをとめたりしてくれる。たねはかんぞうのびょうきなどにつかわれている。

ピワ		和名		枇杷		12
		別名				
分類	科(APG分類)	バラ科		属	ピワ属	
	科(旧分類)			属		
	科(旧分類)			属		
名前の由来	<ul style="list-style-type: none"> ・ピワの実の形が、古代の楽器の『琵琶(びわ)』に似ていることから名付けられた。原産地は中国で日本では1000年以上まえから栽培利用されている。 			 <p>琵琶</p> <p>茨木 塚の浦 秋田精舎 吉野山 笛と琵琶の為の(行)</p>		
樹木の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・果樹栽培としては、九州、四国が盛んで千葉、静岡、和歌山などの海岸地で栽培されている。 ・バラ科の常緑中高木、中国中南部地方原産。「日本三代実録(901年)」や「本草和名(918年)」など多くの文献に記載され、古くから栽培利用されていた。 ・葉は濃緑色で浅い鋸歯があり、長さ20cm、幅10cm程で短い柄がある。表面は革質、裏面は灰白色の短毛が密生する。 ・花は枝先にできる円錐花序に密集して付き、晩秋から初冬に開花し、淡黄色のががった白の5弁花からなる径約1cmで芳香がある。 ・果実は房状につき、球形～倒卵型で綿毛に覆われ、初夏に黄色に熟す。2心室で各室に1～2個の大きな種子があり、表面は黒褐色で光沢がある。 					
用途・その他	<ul style="list-style-type: none"> ・明治の中頃までは約10g程の小粒の在来種でしたが、明治後半に大粒の田中種50gが誕生して、現在私たちが食べているピワは品種改良されたものです。 ・ピワは収穫後、追熟されて美味しくなる果物ではありません。時間が経つと味が落ちてきますので、新鮮なピワを選ぶことが大切です。きれいなオレンジ色、ふっくらと張りがあってヘタの周辺の変色の無い物、さらに産毛が無い物は古いので避けましょう。 ・ピワの果肉は咳止め、胃腸薬。葉には去痰、咳止め、利尿、吐き気止めの効果。種には肝臓病、むくみ、咳止めに効果があると広く利用されています。 			 <p>© dr.northfox</p>		